

畦地 7 号古墳 畦地下遺跡

—市道 1-57 号北市場市田線他に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2024 年 3 月

長野県飯田市教育委員会

例 言

- 1 本書は飯田市建設部が計画する市道 1-57 号北市場市田線他に先駆けて実施した埋蔵文化財包蔵地「畦地 7 号古墳」「畦地下遺跡」に係る記録保存のための緊急発掘調査報告である。
- 2 本書で報告する内容は、令和 4 年度(2022 年度)に発掘調査を実施し、令和 5 年度(2023 年度)に整理・報告書作成作業を実施した。
- 3 調査は、飯田市教育委員会が直営で実施した。対象年度における調査体制は以下のとおりである。

(1) 調査組織

調査主体者	飯田市教育委員会	教育長	熊谷 邦千加
調査担当者	春日 宇光		
作業員	伊東 裕子	翁 詩織	木下 由紀子 熊崎 一夫 小林 洋夫 坂下 比佐夫 関島 修 関島 真由美 中田 恵 中村 千枝子 中村 安伸 中村 地香子 久田 誠 樋本 宣子 福澤 育子 松本 正彦 宮内 真理子 森山 律子 吉川 悦子

(2) 事務局体制

飯田市教育委員会	
教育次長	秦野 高彦(令和 5 年度～)
参与	松下 徹(令和 4 年度)
文化財保護活用課長	宮下 利彦
文化財保護活用課長補佐兼文化財保護係長	下平 博行
文化財保護活用課文化財保護係	木下 正史 春日 宇光 伊藤 蔵之介(令和 5 年度～) 鎌倉 愛梨(令和 5 年度～)
文化財保護活用課文化財活用係長	坂井 勇雄
文化財保護活用課文化財活用係	羽生 俊郎 西脇 充 加藤 大智(令和 5 年度～)
文化財施設整備担当専門技査	市瀬 正勝

(3) 指導・協力

長野県教育委員会 文化財・生涯学習課

- 4 調査略号は以下のとおりとした。

畦地 7 号古墳：AZCK7

畦地下遺跡：AZS3302-3

- 5 本件に伴う業務委託は、以下のとおりである。

基準点測量・地形測量・標高析出：株式会社コパコン

遺物保存処理：株式会社文化財サービス

- 6 発掘調査及び本書の執筆・編集は春日宇光が担当した。

- 7 本書掲載地図(図面)の作成にあたっては、1/25,000 飯田市全図及び 1/2,500 都市計画基本図を使用した。(承認番号 5 飯地計第 268 号)

- 8 調査の記録類および出土遺物は飯田市教育委員会が保管している。

凡 例

- 1 本書で用いる座標値は、世界測地系による。
- 2 遺構には文化庁文化財部記念物課監修 2010 『発掘調査のてびき -集落遺跡発掘編-』p242「表9 遺構記号」に基づき以下の略号を用いた。
土坑：SK 竪穴建物：SI 溝：SD 近世墓：ST 小穴（ピット）：SP 性格不明遺構：SX
- 3 遺構・遺物図版で共通して使用する記号等は、以下のとおりである。
S：岩石 ※土層断面中の岩石類は白抜きとし、記号の記載を省略した
- 4 実測図の断面について、土師器・石器・鉄器は白抜き、須恵器は黒塗りで示した。
- 5 土層観察については小山正忠・竹原秀雄 2015 『新版 標準土色帖』の表示に基づいて記録した。本報告図版上の記載も上記文献に準拠したうえで、土層番号、土色の略号表記（色相・明度/彩度）、土性の略号表記の順に示した。

目 次

第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3節 調査履歴と調査地	5
第3章 調査の成果	7
第1節 基本層序	7
第2節 遺構・遺物	9
第4章 総括	21
参考・引用文献	24

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

飯田市建設部（以下「事業者」）は、北市場地区道路改良事業として、座光寺地区から南大島川を渡り高森町へ至る「市道1-57号北市場市田線」及び付新設道路を計画した。当該区域内には、埋蔵文化財包蔵地「畦地7号古墳」、「畦地下遺跡」および「新井原・石行遺跡」が所在する。本事業に伴う埋蔵文化財の保護について、事業者と飯田市教育委員会（以下「市教委」）が事前に情報を共有し、保護措置の円滑化に努めた。

令和4年5月26日付で文化財保護法第94条の規定に基づく土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知が事業者より市教委経由で長野県教育委員会へ提出された。これをうけ、同年6月17日付で長野県教育委員会から発出された通知により、工事着手前に記録保存のための発掘調査を行うこととなった。その後、長野県教育委員会の指導・助言のもとで事業者と市教委が協議を行い、本件事業地の発掘調査は市教委が実施することで合意に至った。

第2節 調査の方法と経過

1 調査区

北市場地区道路改良においては、産業振興と人材育成の拠点「エス・バード」（旧飯田工業高校敷地）の西を通る市道1-56万才線と、「竜西線」と俗称される市道1-57号北市場市田線の交差点にラウンドアバウトを設置する。さらにそこからエス・バード敷地を通して北へ続く2車線道路及び南大島川を渡河する橋梁を架け、高森町と飯田市を結ぶ計画である。旧飯田工業高校建設時の調査（昭和59年度）と照合した結果、新設する道路用地の大半は過去に調査済みと判明した。一方で、ラウンドアバウト計画地付近は未調査であり、平成2年度の市道万才線の調査の成果から畦地7号古墳の遺構の存在が予想され、本調査を実施することとなった。

調査対象地は既存の市道北市場市田線によって東西2か所に分かれ、調査区を別個に設定する必要がある。そこで、市道を挟んで東側（旧飯田工業高校敷地側）を「調査区1」とし、西側を「調査区2」として順次調査を実施した。



図1 事業計画略図

2 発掘作業及び整理作業の方法

発掘作業は重機による表土掘削を最初に行い、遺構検出後は作業員による人力の掘削へ移行した。遺構は001から通し番号を付与した。遺構の土層堆積状況は、半載や土層観察用群を残して掘り下げを行う等によって観察・記録した。遺物については、可能な場合は層位ごとに取り上げ、必要に応じて出土状況図を作成した。調査中の写真記録は、主としてデジタル一眼レフカメラ（Nikon D750）を使用した。

調査区は当市教委による独自の区画方法（飯田市教育委員会 2009）に準拠し、2m×2mの正方形小区画（グリッド）を最小単位に設定して調査を実施した。調査区2においてはこの方法を用い、遺構の記録と遺物の取り上げを実施した。調査区1では調査範囲が狭小となったためグリッド法を用いず、任意の単点を複数設定して遺構分布図を作成し、委託業者による調査区測量結果と合成する手法で調査区内の遺構・遺物の分布状況を記録した。

遺物の洗浄・注記・接合・復元・実測・拓本はすべて当市教委の直営で実施した。遺物注記にあたっては出土地点により、略号の表記方法を畦地7号古墳（AZCK7）と畦地下遺跡（AZS3302-3）の2種類に整理した。遺物注記は自動注記機を使用し、1段目に調査略号、出土遺構名、その他の情報の順に記載し、2段目に出土年月日を記載した。文字はアルファベット、ローマ数字及び漢字を用いた。遺物の接合は市販の接着剤を使用し、欠損部分は石膏を補充して復元のうえ、アクリル絵の具で着色した。遺構・遺物等の図面類は実測図をもとに第二原図を作成し、Adobe社製ソフトウェア（Illustrator）を用いてトレースした。執筆・編集作業は同社製編集ソフト（InDesign）を使用した。

3 調査の経過

令和4年

- 11月8日 重機（バックホウ）を搬入、調査区Ⅰの表土掘削、同日中に終了
- 9日 現場設営・整備作業を行い、作業員による遺構精査
- 10日～ 遺構の検出及び遺構の掘削、写真・図面記録作業
- 17日 調査区Ⅰの記録作業終了
- 18日 重機による調査区Ⅰの埋め戻し
- 19日 重機による調査区Ⅱの表土掘削を開始、一部排土の宮崎処分場への搬出を実施
- 21日 重機掘削・搬出を継続、作業員による遺構精査作業開始
- 22日 重機掘削終了
- 25日 調査区Ⅱの壁面精査等を実施
- 28日～ 遺構の検出及び遺構の掘削、写真・図面記録作業

令和5年

- 1月10日 重機による調査区Ⅱの埋め戻し開始
- 12日 埋め戻し完了、現地作業終了

現地における発掘作業の終了後、本格的な整理作業に先駆け、飯田市考古資料館と飯田市考古博物館で基礎的整理等作業を行った。令和4年度末となる令和5年3月に事業を総括して清算し、令和5年度に本格的な整理作業を実施することとし、5月1日に市教委と事業者間で報告書刊行作業に関する合意に至った。作業は調査担当者の指示のもとで作業員が行った。遺物写真撮影、原稿の執筆、図版の作成は調査担当者が行った。令和6年3月に本報告書を刊行した。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

地質環境 当遺跡が所在する長野県飯田市は県南部の都市であり、標高3000メートル級の高峰が連なる木曾山脈と赤石山脈に挟まれた伊那盆地の南側に位置する。伊那盆地は一般的に「伊那谷」と呼び習われ、盆地の中央には諏訪湖から発した天竜川が南流する。

伊那盆地南部の地質環境は、領家帯といわれる中央構造線北側の変成帯に属する。大部分を占める花崗岩体は、その貫入の時期によって古期と新期に分かれる。花崗岩体の上には土石流などによって運搬された砂礫層が堆積し、さらにその上に火山灰による風成ローム層が乗ることが多いが、最低位の段丘面ではローム層がみられない。これらの地質環境を基軸に、山麓部から天竜川河床の間に比高差約10～20m程度の段丘崖が数段にわたって発達するのが景観上の大きな特色であり、多くは山体の隆起にともない生じた逆断層によって形成されたとされる。これら標高差のある平坦面は、念通寺断層付近を境に大きく「上段」（うわだん）と「下段」（しただん）に分かれる。各段丘は、面ごとに立地や成因などによって分類される。『下伊那の地質解説』（下伊那地質誌編集委員会1976）によると、当遺跡一帯は「低位段丘Ⅱ」に区分され、飯田市上郷別府付近を標識とする「別府面」にあたる。別府面は標高410m～420mの段丘面で、堆積物は礫を主体とし、火山灰はみられないことが特徴とされる。

遺跡の立地 畦地下遺跡は天竜川支流の南大島川右岸の微高地上に広がる。遺跡の範囲は南北約400m、東西幅約250mで、南大島川が流れる東方・南方に向けて傾斜する、扇状地状の地形に属する。南大島川の downstream に傾斜が続いて新井原・石行遺跡に至るが、南方はやや低い面となり、高岡遺跡・平地遺跡となる。新井原・石行遺跡は南大島川の downstream に隣接する。同遺跡よりも標高が低い位置にあり、傾斜は緩やかである。南北約500m、東西約330mの範囲をもつ広大な遺跡として登載されている。一帯には新井原、石行、高岡の各古墳群が分布し、各時代の居住域の存在も判明している。新井原・石行遺跡における昭和59年度の調査では、南大島川の氾濫の影響を受けた痕跡が確認された。流路は新井原15号古墳や同17号古墳などの一部を削り取っており、当該地が河川の影響を受けやすい場所でありながら、集落・墓域が営まれていたことを示している。今次調査でも確認されたように、江戸時代の「未満水」の痕跡が一帯に広がることも、南大島川上流から運ばれてくる土砂の影響を物語る。

第2節 歴史的環境

座光寺地区では、縄文時代に美女遺跡や新井原・石行遺跡などで早期の集落が形成される。中期後葉は当地域が最も繁栄した段階のひとつであり、市内各地の山麓部から中段段丘を中心に集落が激増した。弥生時代には、当地域に稲作が伝来し、生活様式に変化がもたらされる。中期中葉に低位段丘上に集落が発達し、湿地を生産域として農業生活が営まれる。後期になると集落が中段段丘から高所の山麓部にまで広がり、集落数も激増する。

飯田市域で古墳の本格的な築造が開始するのは中期前半以降である。近年、中期から後期にかけて飯田市域を中心に築造された前方後円墳・帆立貝形古墳を一体的にとらえ、「飯田古墳群」と呼称している。当古墳群を特徴づけるのが、馬の埋葬および馬具の出土例の多さである。これらから、大

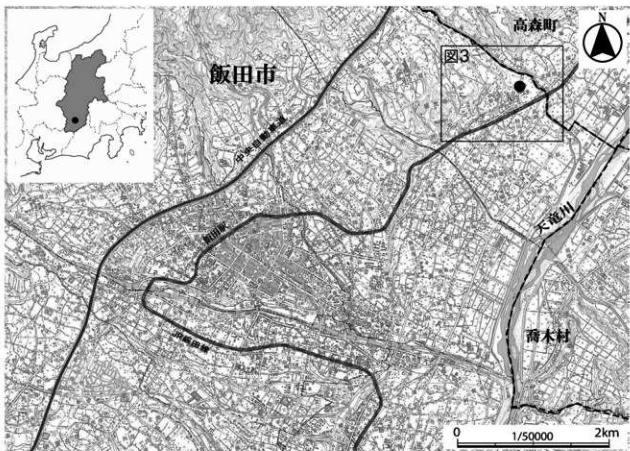


図2 調査位置(1)

陸から導入された馬の飼育や生産を管理する集団の存在が想定されており、当時のヤマト王権の政策を顕著に伝えるものとして、前方後円墳 11 基と帆立貝形古墳 2 基が国史跡に指定されている。座光寺地区では中期に帆立貝形古墳の新井原 12 号古墳が、後期には高岡第 1 号古墳がそれぞれ盟主的な古墳として築造され、その周辺において新井原、石行、高岡、壺丈藪、石塚、ナギジリなどの古墳群が発達し、連綿と古墳の築造が続いた。

奈良時代に律令制が導入されると当地域は東山道信濃国伊那郡に編入され、伊那郡を統治する郡衙が設置された。正倉院や祭祀遺構が確認された座光寺地区の恒川遺跡群は伊那郡衙の跡地であることが確実視され、恒川官衙遺跡の名称で国史跡に指定されている。

平安時代末期以降は律令制の崩壊にともない、荘園の開発が進んだ。室町時代から安土桃山時代にかけては、段丘端部や独立丘陵を利用した中世城郭が残るが、正確な履歴はほとんど判明していない。座光寺地区では座光寺氏が在地の土豪として文献に名がみえる。戦国期は竜東の知久氏が勢力を伸ばしたが、天文 23 年（1554）、甲斐の武田氏の侵攻を受けて滅亡し、座光寺氏ら飯田近辺の諸将もこれに従った。天正 10 年（1582）には織田氏が伊那谷に侵攻し、武田氏の勢力は一掃された。その後、江戸時代に幕藩体制のもとで飯田藩の所領となり明治に至った。

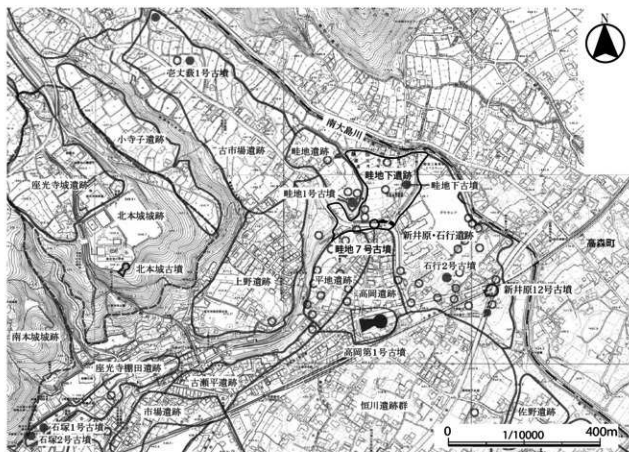


図3 調査位置(2)

第3節 調査履歴と調査地

畦地下遺跡地 かつて「石行遺跡」と呼ばれた畦地下遺跡から新井原・石行遺跡にかけての区域は、飯田市と高森町の境界をなす南大島川右岸の緩傾斜地である。当遺跡内には長野県蚕業試験場飯田支場があったが、昭和12年に当試験場の桑畑より刀剣、鉄銭等多数が発見されていたことが判明した。これにより、『下伊那史』に記載されていない煙滅古墳の存在が知られるようになった。その後、蚕業試験場跡地に飯田工業高校の移転改築が計画されたことで広大な範囲が調査対象となり、昭和59(1984)年から2か年度にわたる発掘調査が行われ、新井原、高岡の両古墳群に属する円墳群や馬匹関連の遺構・遺物、縄文時代早期・晩期の遺構、中世の大規模な墳墓群などが検出されるに至った。これらの経緯と成果は概略が発表されている(岡田1986ほか)が、詳細は未報告である。その後、飯田工業高校の開校に併せて座光寺の上段と下段を結ぶ新設市道(万才線)が計画された。この区間のうち、第1工区として旧国道から高校入口に取りつく部分を先行させるため遺跡の保護協議が実施され、平成元(1989)年度に道路用地の発掘調査が実施された。この際、削平された高岡3号・4号古墳が検出され、周溝・葺石、埴輪などが出土した。以上の調査地は包蔵地の改訂にともない変更され、現在は「新井原・石行遺跡」に一括されている。第1工区の延長上にある畦地下遺跡の範囲は第2工区として、平成2(1990)年度に道路用地の発掘調査が実施された。

畦地7号古墳 第2工区の調査で発見された古墳は未知の古墳であったため、畦地1～6号古墳の後に続けて7号古墳とされた。この際に全体の約「約7分の1」が調査された。報告によれば、調査範囲が狭く正確な復元は困難としつつ、墳丘直径は約22m、周溝外縁で38mと想定されている。

周溝は縁辺部が把握できなかったが、その幅は8m程はあると考えられた。墳丘は当初残存しないものとみられたが、調査区壁面の観察によって7層にわたり質の異なる土をつき固めて墳丘を構築した、としている。葺石は一部を除いてほとんどが周溝底部に転落していた。遺物は墳丘南西部の周溝内堆積土中から翡翠製切子玉等の玉類、馬具、須恵器等が出土した。須恵器には奈良時代の製品が含まれ、追葬が想定された。主体部は残存していなかったが、調査区北壁に最大幅約2m、厚さ約60cmの巨岩が突き出ており、横穴式石室の存在が指摘された。これらの状況から、当古墳の主体部はすでに破壊を受け、副葬品も大半が散逸したとみられている。

今次調査地点 今次発掘調査の対象となった敷地は、高森町と座光寺地区を結ぶ市道北市場市田線と、座光寺地区の上段から下段までを縦貫する市道万才線が交差する地点である。北市場市田線によって、調査対象地は西側と東側に分断され、さらに西側は竜西一貫水路によって狭小な区画となっている。調査区は畦地下遺跡の南東端で、新井原・石行遺跡との境界付近に位置する。事業地は畔地7号古墳が発見された平成2年度調査区と連続していることから、調査に着手する前から対象地内に畦地7号古墳の遺構が存在することが想定された。

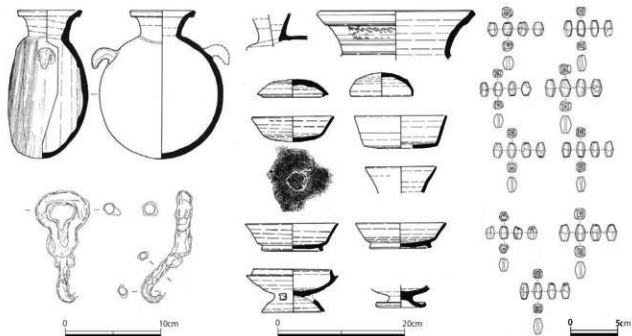


図4 畦地7号古墳 平成2年度調査の主な出土遺物

第3章 調査の成果

第1節 基本層序

基本層序は調査区2の北西壁(図5 A-A')で把握した。地表から遺構検出面までの深さは調査区1では約80cm、調査区2で約80～120cmである。地表側からI層からVI層まで把握した。I層は表土(耕作土)、II層は礫を多く含む暗黄褐色砂土、III層は礫を含む暗黄灰色砂土、IV層は礫を少量含む褐色砂壤土、V層は礫を含む黄褐色砂土、VI層は礫を多く含む灰黄色砂礫層である。V層上面を遺構検出面とした。IV層は畦地7号古墳の周溝内では奈良・平安時代の土器を含む層の上位にあるため、中世に堆積した土層と考えられる。

II層は多量の礫を含む黄白色の砂礫層で、これまでの座光寺地区における発掘調査の成果より、当地域の広範囲に被害をもたらした正徳5(1715)年の「未滴水」によって堆積した土砂と特定できる。よって、II層に一括して覆われたIII層上面は江戸時代の地表面である。特に、調査区1東壁断面(図6・写真図版6)ではII層直下に暗褐色のIII層が分布しており、II層との境界が50～80cm程の間隔で波打つように上下する。これは洪水発生時に営まれていた畑作による畝の断面であり、未滴水の洪水砂礫によって覆われて残った江戸時代の耕作土の断面を示すものと考えられる。洪水後に天地返しがおこなわれた痕跡は認められないため、洪水被害後に畑作は廃絶したとみられる。なお、調査区2ではこのような畝の痕跡は確認されず、両地点で江戸時代の土地利用形態は調査区の東西で異なっていたものと思われる。

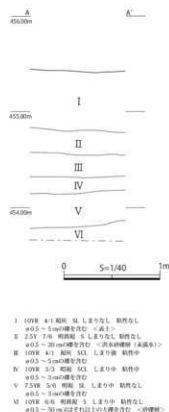


図5 基本層序

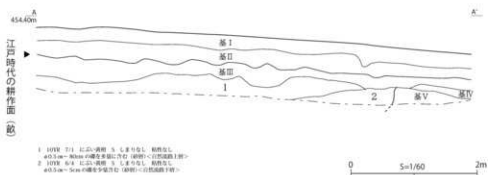


図6 調査区1 東壁土層

第1節 基本層序

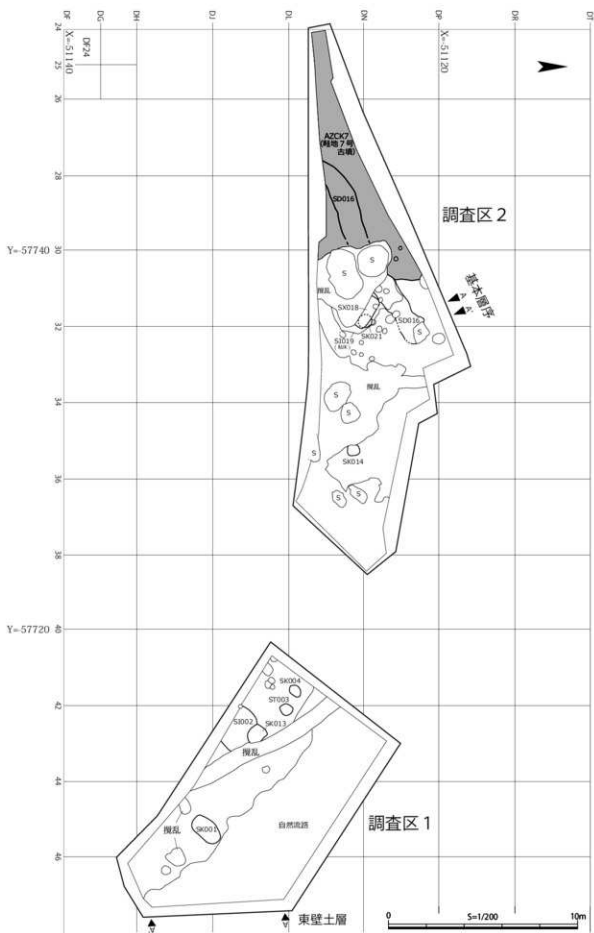


図7 遺構分布図

第2節 遺構・遺物

本調査で把握した遺構は次のとおりである。

古墳（畦地7号古墳）	1基
竪穴建物（中世）	2基
溝	1条
土坑	6基
近世墓	1基
柱穴・小穴	26基
性格不明遺構	1基

1 古墳

畦地7号古墳（AZCK7）（図8・9、写真図版3～5）

調査区2の西端で墳丘と周溝を検出した。市道と竜西一貫水路が斜めに交差する地点のため、調査範囲は鋭角な三角形の区画に制約された。また、2個の巨石が周溝の外縁付近にあり、それらの下には周溝が残存していた。巨石を調査中に撤去することは物理的に不可能であったため、巨石を残して周溝の掘り下げをおこなった。

墳丘 周溝からの立ち上がりが緩やかに傾斜を変換した箇所にて大型の石が設置されている。ここを墳裾とし、そこから墳丘中央側に幅約1m、奥行3.7m程度のトレンチ状の調査範囲で墳丘部分の状況を記録した。墳裾から墳丘中心部方向に伸びるトレンチ西端までの間は30～40cm程立ち上がるのみで、かなり緩慢であり、テラス状の平坦面となる。この箇所には堅固な地山（V層）の上面に直径10～50cmほどのまばらな大きさの礫が、互いに1/3程を重ねつつ不規則に敷き詰められている。それらのほとんどが灰白色・黄白色の花崗岩の円礫で、わずかに青色のチャート質の礫も含む。いずれも周辺の河川敷で採取可能である。この「礫敷」は地山をある程度掘削して形成した面の上に人為的に敷かれていることは確実である。さらに、「礫敷」の上層には褐色・黒色の層（15・16・17層）が堆積する。これらは平成2年度の調査で墳丘の構築土とされており、墳丘構築土の最下層に礫が敷かれてしていることになる。つまり、地山を掘削・整地した上に礫を敷き、その上に土を盛って墳丘を構築したということになるが、墳丘内部最下層に敷かれた礫の存在は過去調査では指摘されていない。今回は調査範囲が狭小であったため、礫と墳丘構築土との関係はそれ以上把握することができなかった。

周溝 墳丘北東側の周溝の一部を把握した。墳裾から周溝外縁までの幅は9.5m、深さは周溝外縁部から最深部まで約70cmを測る。墳丘側と周溝外縁からそれぞれ最深部に向けて緩い勾配を示す。底部は幅5m程度にわたって概ね平坦な面を形成する。覆土の堆積層は4～14層に分かれる。いずれも混じり気が乏しい均質な堆積土層で構成され、周溝底部に沿ってレンズ状に堆積する。これらの状況から、周溝は自然に埋没したとみられる。基本層序IV下の1層中からは焼締陶器類や輸入陶磁器の出土があり、中世の堆積層とみられる。2層には須恵器片ほか灰釉陶器片が含まれ、平安時代を中心とする堆積時期が考えられる。3層出土遺物は須恵器片と土師器片であり、古墳築造後間もない段階の堆積層と考えられる。奈良・平安時代の溝SD016によって周溝内の一部が壊されている。

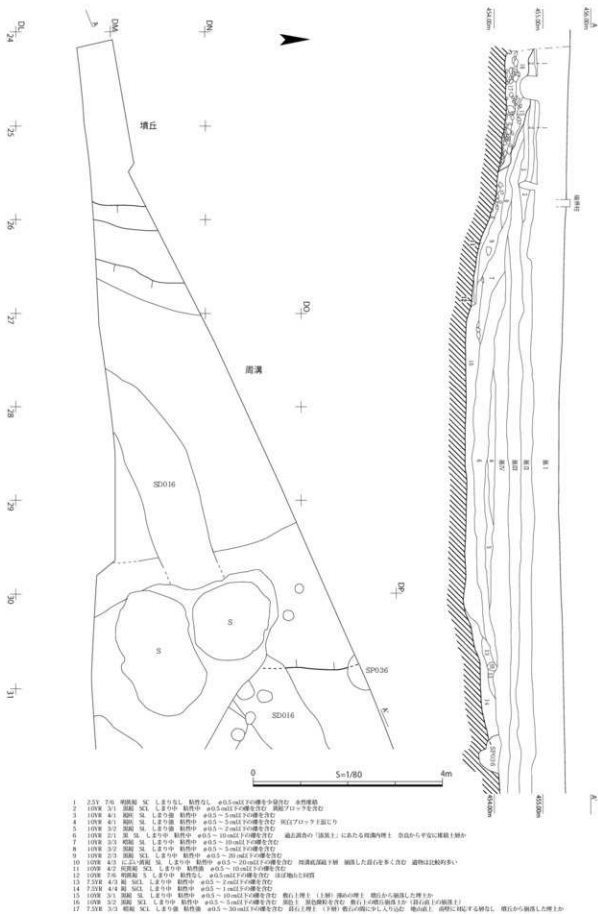


図8 AZCK7(畦地7号古墳)

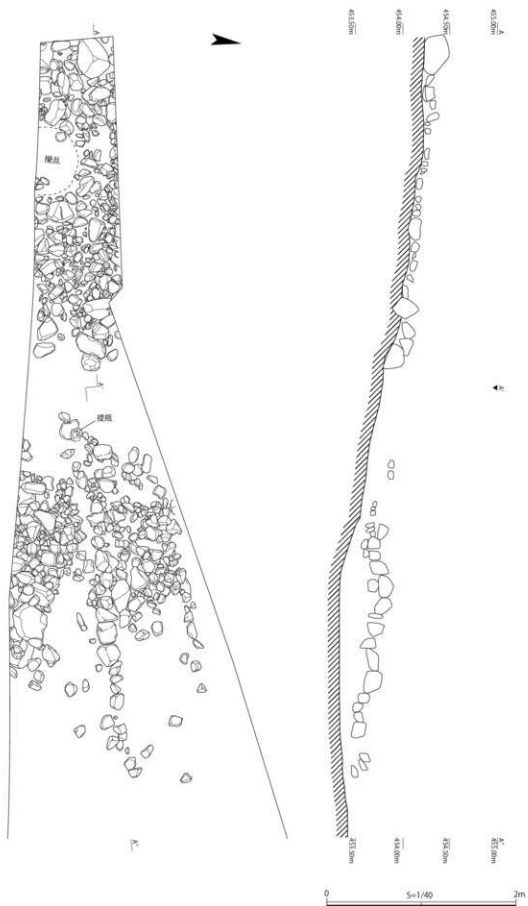


図9 AZCK7 礎

周溝斜面から底部にかけて礫が密集分布する。礫の特徴は墳丘に敷かれたものと同様であるが、上下に数個重なる部分もみられる。大半が周溝底面より10～40cm程度浮いており、褐色土層(10層)中に含まれる。一見すると墳丘中心に向けて一直線の列をなしているように見える箇所(図9A'—A")があるが、これらも周溝底面から不揃いに浮いており、人為的なものではない。全体として規則性はなく、すべて墳丘斜面から自然の作用で崩落した葺石の蓋然性が高い。

遺物出土状況 遺物は須恵器が主体であり、墳丘葺石の直上に堆積する崩落土層と周溝内からそれぞれ出土しているが、全体的に量は少ない。すべて破片化しており、出土時に原形・原位置をとどめていたと思われるものはない。周溝堆積土の最下層である10層に由来するものが最も多く、その上位の6～9層からも若干を得られた。破片が接合した須恵器についても墳丘斜面や周溝の中層、下層中に破片が散在しており、出土位置にまごまごはみられない。

出土遺物 図10-1は須恵器の提瓶で、口縁部の一部破片と、胴部破片からなる。外面に濃緑色の自然釉が付着する。胎土は長石粒と黒色粒を含む。頸部から肩部にかけての接合部は失われ、胴部は膨らみのある正面と、平坦な面をもつ裏面に分離している。口縁部は外反し、端部は断面三角形状に突出するが、やや丸みを帯びる。胴部の直径は19.4cmに復元できる。正面は焼成時の収縮によって一部が歪んでいる。内面側には胴部中央に直径4.3cmほどの円孔の痕跡が明瞭に残り、胴部成形の最終段階でこの円孔を外側から粘土板を充てて塞ぎ、外面を回転力キメで整えている。胴部裏面は平坦であり、成形時に底部であったとみられ、特に調整痕はみられない。両肩に付されていた双耳は片方の1点が残る。形状は半環状を呈し、両端を胴部に接合する。

2は甕の胴部下半である。外面は暗緑色の自然釉に覆われていて不明瞭だが、胴部のやや上方に水平方向の沈線が引かれ、その間を斜行する沈線を加飾する。胴部以外は残らないものの、小型の胴部に対して上に大きく広がる口縁がつくとみられる。

3～8は甕である。3は外反しながら直線的に伸びる口縁部から頸部までの破片で、胎土は精緻かつ白色土をマーブル状に含む。口縁端部の直下に波状文を2段にわたって施文する。4～7は胴部の破片である。8は厚手で、外面に窯道具が付着したとみられる円形の痕跡があり、底部付近である。いずれも砂粒の含有が少ない精緻な胎土で、外面は平行タタキで調整されるが、内面にタタキ目はみられず、板状の工具あるいは指ナデ等で丁寧に消された痕跡が残る。5・6はタタキの後の外面に横線を加えている。これらは胎土や自然釉の質感から同一個体の可能性がある。

須恵器のうち全体的特徴がわかる提瓶については、大阪府南部(陶邑)古窯址群を基軸とする編年(田辺1981)においてMT15型式期に出現し、TK209型式の段階まで続くと考えられる。提瓶の変遷については、基本的に小型化を辿る傾向がある。これに加え、出現直後は口縁部が外反しつつ端部が三角形に突出して加飾され、TK43型式までこの傾向は続くものの、それ以降は直立口縁となり形骸化するという(小池2010)。以上によれば、口縁端部がやや突出しつつ、小型化の兆しがみえる本例の時期はTK10～TK43型式並行期に位置付けられよう。なお、甕の破片はいずれも内面にタタキ目が残らず、ヘラ状の工具により刷り消されている。これらは古墳時代中・後期に愛知県東山古窯址群で生産された須恵器甕にみられる技法とされる(岩崎1987・角脇1996)。

2 竅穴建物

SI002(図11、写真図版7)

調査区1南壁側で検出した竅穴建物である。平面形は隅丸方形を志向するが、南半分は調査区外へ続き、北側は土坑SK013及び近世以降の暗渠に切られ、遺構の全容は不明である。東壁から西壁

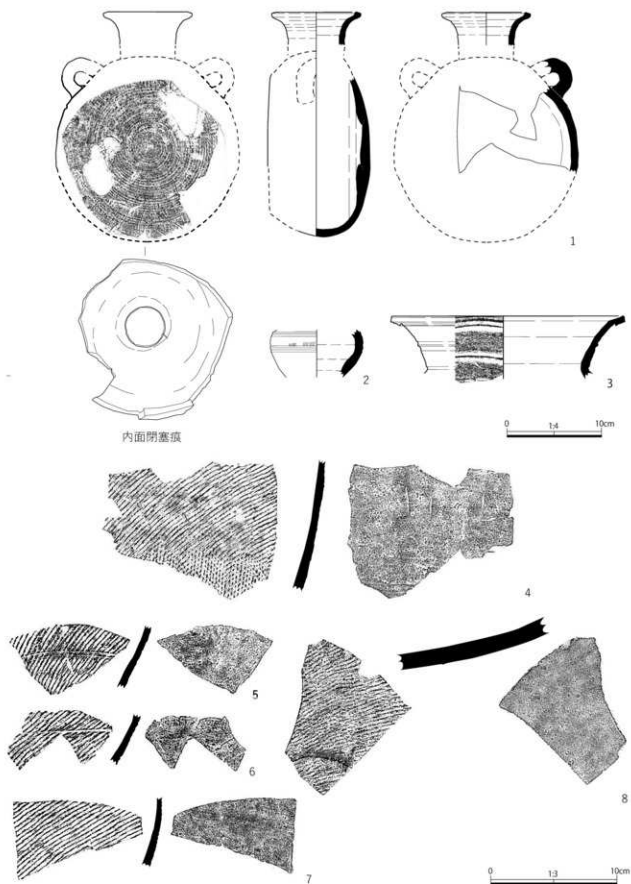


図10 畦地7号古墳 出土遺物

までの規模は2.2mを測る。覆土は黒色の2層・3層が主体となる。一部に貼床の残骸の黄褐色ブロック土が含まれ、やや複雑な堆積を示す。床面の一部は砂礫を含む黄褐色の粘質土が5～10cm前後の厚みをもって貼られ、硬く叩き締められる。壁は床から緩やかに立ち上がる。P1は直径20cmを測り、底部に柱の当たりが直径10cmの凹部となって残る。P2はP1よりやや浅い小穴で、それぞれ柱穴であろう。建物内東壁寄りにもP3が掘られているがP1より浅く、柱の痕跡はない。遺物は覆土中から瀬戸・美濃系の陶器片が1点出土した。本遺構は中世に帰属する建物とみられる。

SI019 (図11)

調査区2で把握した竪穴建物である。検出時に壁と覆土は失われており、貼床の分布によって本遺構を把握した。巨礫の攪乱とSX018に大きく切られる。貼床の残存範囲は南北約3.9m、東西約3.0mの平面不整形の範囲で、厚さ10cm前後の黄褐色砂質土を貼り固めている。SP027、031～033は貼床の範囲内にあり、当建物にともなう柱穴の可能性はある。出土遺物はないが、奈良・平安時代の溝SD016の埋没後に構築されているため、構築時期は中世とみられる。

3 溝

SD016 (図11、写真図版7)

AZCK7の周溝を切る溝で、平成2年度の調査で記録されている「溝」の延長部分を把握した。今次調査区での全長は10.8m、幅は90～125cmを測る。遺構検出面からの深さは北端付近で40cmほど、断面は逆台形を呈する。調査区2北壁の手前から南西方向にほぼ直線的に伸びるが、畦地7号古墳の墳裾手前で南へ角度をわずかに変えており、構築する際に墳丘を避けた蓋然性が高い。この中間の巨礫の下については未調査である。当遺構は畦地7号古墳周溝覆土の6層以下を掘り込んで構築されており、6層の堆積時期が奈良～平安時代とみられることから、当該期に掘削されたと考えられる。溝内覆土は黄色の地山ブロックや黒色土のブロックが入り混じることから自然に埋没したとは考え難く、何らかの理由で埋め戻されたとみられる。なお、A-A'断面の上層(1層)は本遺構の埋没後に構築された中世の竪穴建物SI019の貼床である。

4 土坑

SK001 (図12、写真図版7)

平面長楕円形の土坑である。長軸長180cm、短軸長100cmを測る。底部は概ね船底状だが、中心付近がやや平坦となる。土層の堆積状況から自然に埋没したと判断しうる。出土遺物はない。

SK004 (図12)

平面楕円形の土坑である。長軸長70cm、短軸長52cmを測る。出土遺物はない。

SK013 (図12)

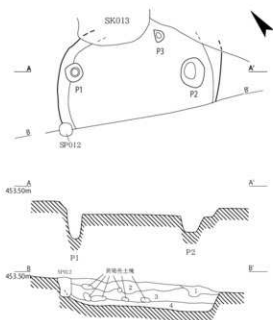
平面楕円形の土坑である。中世の竪穴SI002の一部を切る。長軸長100cm、短軸長75cmを測る。出土遺物はない。

SK014 (図12、写真図版7)

平面隅丸方形の土坑である。長軸長65cm、短軸長60cmを測る。出土遺物はない。底部の南側は円形に掘りくぼめられており、柱穴の可能性はある。出土遺物はない。

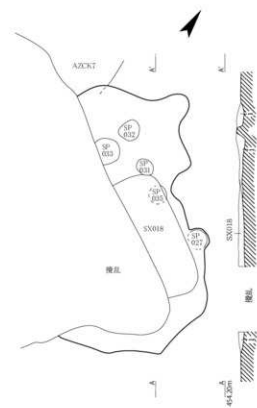
SK017 (図12)

平面円形の土坑である。長軸長50cm、短軸長44cmを測る。断面船底状を呈する。出土遺物はない。



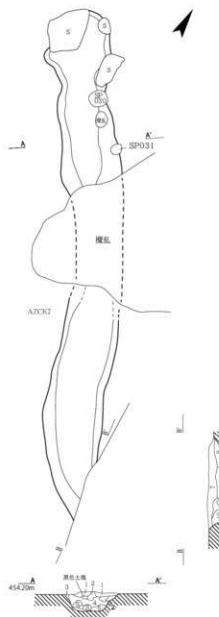
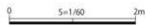
- 1 101層 4/4 層 瓦、土層中、動物中、φ0.5～1.0mの溝を含む
- 2 101層 3/1 層瓦、土層中動物中、φ0.5～1.0mの溝を含む
- 3 101層 3/2 層瓦、土層中、動物中、φ0.5～2.0mの溝を含む
- 4 101層 7/6 相模瓦、SCL、土層中、動物中、φ0.5～0.8m以下の溝を含む、動物屎、黒曜石、土層中

SI002



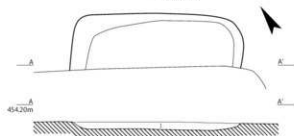
- 1 101層 7/6 相模瓦、SCL、土層中、動物中、φ0.5～0.8m以下の溝を含む、動物屎、黒曜石

SI019



- 1 101層 7/6 相模瓦、SCL、土層中、動物中、φ0.5～0.8m以下の溝を含む、動物屎、黒曜石
- 2 101層 3/1 層瓦、瓦、土層中、動物中、φ0.5～0.8m以下の溝を含む
- 3 101層 5/6 層瓦、SCL、土層中、動物中
- 4 101層 3/2 層瓦、瓦、土層中、動物中、φ0.5～3.0mの溝を含む、黒曜石、黒曜石片
- 5 101層 4/1 層瓦、瓦、土層中、動物中、φ0.5～0.8m以下の溝を含む
- 7 101層 4/2 相模瓦、SCL、土層中、動物中、φ0.5～0.8m以下の溝を含む、黒曜石、黒曜石片
- 8 101層 3/3 相模瓦、SCL、土層中、動物中、φ0.5～0.8m以下の溝を含む
- 9 101層 3/2 層瓦、SCL、土層中、動物中、φ0.5～0.8m以下の溝を含む、黒曜石を含む
- 10 101層 4/2 相模瓦、SCL、土層中、動物中、φ0.5～0.8m以下の溝を含む、黒曜石を含む
- 11 101層 4/3 土、土、黒曜石、SCL、土層中、動物中、φ0.5～0.8m以下の溝を含む
- 12 101層 7/6 相模瓦、瓦、土層中、動物中、φ0.5～0.8m以下の溝を含む、動物屎、黒曜石

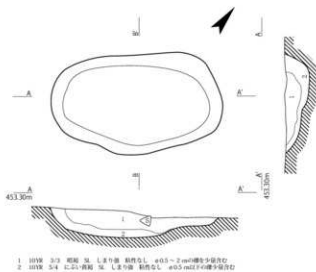
SD016



- 1 101層 3/2 層瓦、瓦、土層中、動物中、φ0.5～1.0mの溝を含む

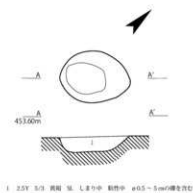
SX018

図 1 1 SI・SD・SX



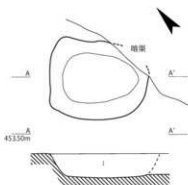
1 101K 3/2 堀削 瓦、L.879mm 敷布なし、 $\phi 0.5 \sim 2.0\text{m}$ の溝少量存在
2 101K 5/4 E.21-1掘削 瓦、L.879mm 敷布なし、 $\phi 0.5\text{m}$ 以上の溝少量存在

SK001



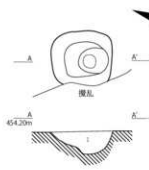
1 25Y 5/3 掘削 瓦、L.879mm 敷布なし、 $\phi 0.5 \sim 5\text{m}$ の溝存在

SK004



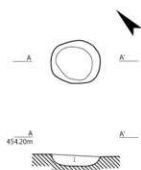
1 101K 3/3 増築 瓦、L.879mm 敷布なし、 $\phi 0.5 \sim 5\text{m}$ の溝存在

SK013



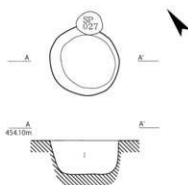
1 101K 4/2 掘削 瓦、L.879mm 敷布なし、 $\phi 0.5 \sim 3\text{m}$ の溝存在

SK014



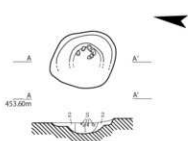
1 101K 3/2 掘削 瓦、L.879mm 敷布なし、 $\phi 0.5\text{m}$ 以上の溝少量存在以上、瓦少量存在

SK017



1 101K 3/2 掘削 瓦、L.879mm 敷布なし、 $\phi 0.5 \sim 5\text{m}$ の溝存在

SK021



1 101K 5/3 E.21-1掘削 瓦、L.879mm 敷布なし、 $\phi 0.5\text{m}$ 以上の溝少量存在
2 101K 6/6 掘削 瓦、L.879mm 敷布なし、 $\phi 0.5\text{m}$ 以上の溝少量存在

ST003

図 1 2 SK・ST

0 5=1/40 1m

SK021 (図 12、写真図版 7)

平面円形の土坑である。長軸長 75cm、短軸長 70cm を測る。断面は箱状に、やや深く掘りくぼめられている。出土遺物はないが、埋没後に SI019、SP027 に切られることから、中世以前の遺構とみられる。

5 近世墓

ST003 (図 12)

平面不整楕円形の土坑である。長軸長 75cm、短軸長 62cm を測る。縁辺から 1 段掘り込まれ、中央付近がさらに深く掘り込まれる。東側半分は半截の際に段状の部分ごと深く断ち割ってしまったため記録できたプランは外縁部のみである。中央に直径 3～5cm 程度の小型の自然礫が配されており、この間から銅製の煙管の吸口、急須とみられる陶器片が各 1 点出土した。以上から、本遺構は近世の墓と考えられる。

6 巨石

調査区 2 の畦地 7 号古墳周溝外縁付近に花崗岩の巨石 2 個を含む攪乱がある (図 13)。直近の耕作土 (表土) を剥ぐと頂部が露出した。攪乱はごく最近のもので、巨石は埋め立てて廃棄されたものとみられる。下半が埋もれた状態で記録したため全体の規模は不明だが、巨石 1 は 2.8 m × 1.6 m、厚さは少なくとも 1.6 m 以上あり、巨石 2 は 1.6 m × 1.6 m、厚さ 1.2 m 以上を測る。加工痕はなく、自然礫そのものである。調査区 1 の自然流に含まれている礫は最も大きいものでも直径 80cm 程であり、調査区付近まで自然の作用で運ばれてきたとは考えにくい。調査区 2 内には、これらよりもやや小型の石が同様に廃棄されており、後述するように古墳の石室に用いられていた用材の可能性が考えられる。

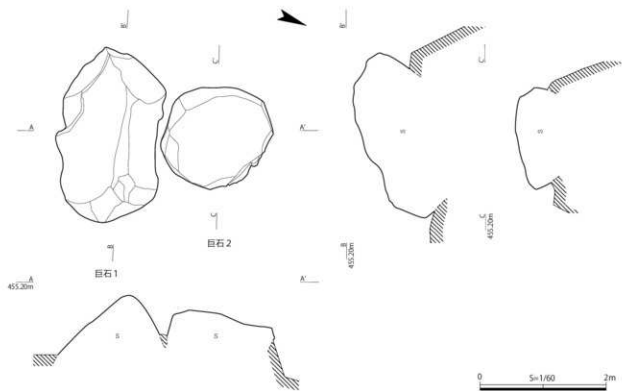


図 13 巨石

7 小穴・その他

小穴は26基を検出した(図15・16)。SP005～030は柱穴もしくはその他用途不明の小穴である。いずれも建物として把握はできなかったが、底部に硬化した柱の当たりが明瞭に残るものがある。SP006の柱は直径10～12cm程度であったとみられる。SP005、007は006と重複しているため、立て替えがなされた可能性がある。SP008～011も断面等に柱痕が残る。遺物はSP010、015から中世陶器片が出土した。また、SP027、031～033は奈良・平安時代の溝SD016を切る。以上から、柱穴の一部は中世に位置づけられる。

SX018(図11)は調査区2で検出した性格不明遺構である。堅穴建物SI019を切り、巨礫を含む攪乱に南側を大きく壊されている。掘りこみはごく浅く船底状である。性格は不明だが、中世のSI019を切ることから、中世以降に構築されたとみられる。

8 その他の遺物

1・2は、畦地7号古墳から出土した混入遺物である。1は土師器の坏で、墳丘葺石の上層から出土した。丸い底から立ち上がり、口縁部付近で折れて外反する。内面に炭素を吸着させ黒色処理されている。古墳時代後期の所産である。2は土師器の高坏の脚部で、周溝堆積土中層に包含されていた。いわゆる脚部屈曲高坏であり、時期は古墳時代中期である。3はSD016から出土した須恵器の蓋である。頂部に扁平化したつまみがつく。時期は7世紀後半から8世紀前半までに収まる。このほか、畦地7号古墳周溝1・2層出土遺物として中世の陶器片、青磁の破片数点がある。2層からは中世陶器のほか灰釉陶器片が若干出土した。

4の打製石斧は調査区2の遺構外出土遺物である。硬砂岩製の完形品で、長さ16.2cm、最大幅7.6cmを測る。このほか、縄文時代の黒曜石製の石鏃が1点出土した。

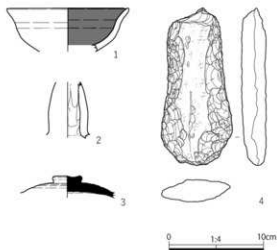


図14 その他の遺物

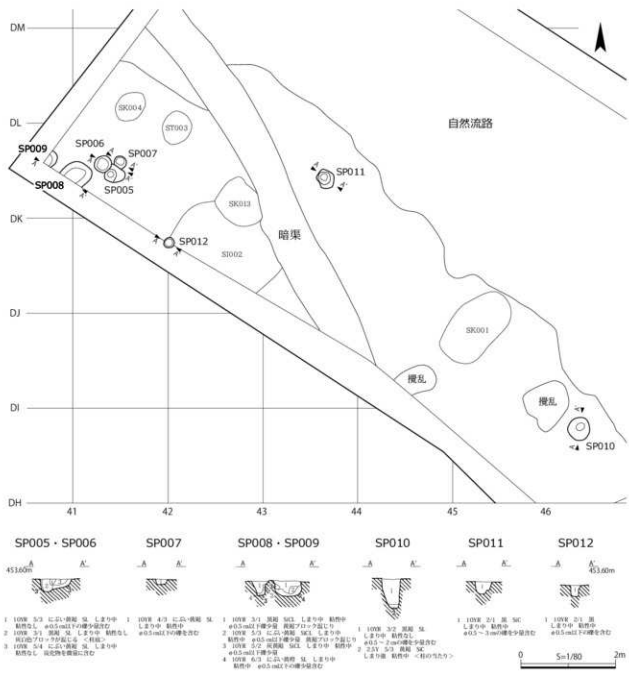


図 1 5 調査区 1 小穴分布図



図16 調査区1 小穴分布図

第4章 総括—畦地7号古墳の再評価を中心に—

市道1-57号北市場市田線他にもなう今調査では、畦地7号古墳の墳丘・周溝を把握したことが主要な成果である。過去調査の成果と今調査の成果を合わせて考察し、当古墳の再評価をもつて総括としたい。

古墳の構造 今調査で新たに畦地7号古墳の墳丘東端の一部が把握された。墳丘の平面的な形状は全体に調査が及んでいないため断定はできないものの、前回調査と今調査の成果から、直径23m程度の規模をもつ円墳と考えられる。また、周溝は今回の調査で初めて外縁まで把握し、その幅は約9.5mと判明した。これらにより、当古墳の規模は、墳丘の直径23m、周溝を含めた範囲は直径約42mに復元される(図17)。これは平成2年度の調査時に推定された範囲より若干規模が大きくなる想定である。墳丘・周溝の北側約半分は未調査のまま果樹園の下に残存するとみられる。

墳丘については、基底に置かれたとみられるやや大型の石を根拠に墳裾とした位置から墳丘の内側にあたる範囲で「礫敷」を検出した。前回調査では7層にわたる墳丘盛土の存在が指摘されており、今調査における礫敷上の土層(15・16・17層)がそれにあたる。しかし、それらの下に礫が敷

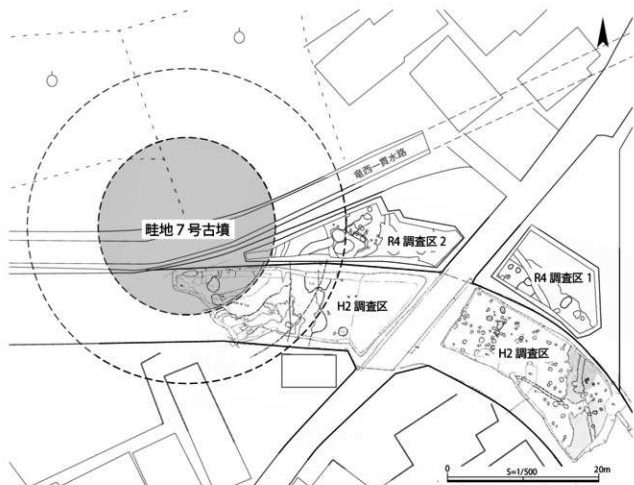


図17 平成2年度・令和4年度調査合成図

かれている点は、過去の調査では言及がない。当該箇所調査範囲が極めて狭小であったこともあり、礫敷の用途については不明のまま、少なくとも葺石をともなう古墳であったことを確認したにとどまる。なお、埴輪についてはまったく出土しておらず、当初から樹立がされていなかったと考えられる。

埋葬施設については、平成2年度調査で横穴式石室の用材と推定される長さ2m程の石が墳丘の中央付近で確認された。今次調査では主体部に関する直接的な情報は追加されなかったが、周溝外縁部付近に巨石2個が廃棄されていた。この巨石については、規模や形状などからして石室用材とみられることは報告文中で述べた。これらが当古墳に用いられていたと断定できる状況証拠はないものの、当古墳に横穴式石室が存在した蓋然性は高くなった。

築造・埋葬時期 平成2年度調査で出土した遺物の内訳は、馬具（「引手」、玉類（切子玉・ガラス玉・白玉）、須恵器（坏身・蓋环・提瓶・高环・広口壺・甕）、土師器、須恵器模倣土師器等である。今次調査では須恵器（提瓶・甕・甕）が出土した。そのうちの一部は愛知県猿投窯産の特徴を有する。

古墳時代の須恵器は2点の提瓶がともにTK10～TK43型式並行期に位置付けられる（小池2010）。その他の遺物について、平成2年度調査の報告書上で馬具の「轡の引手」とされていた鉄製品を再実測し、図18に示した⁽¹⁾。本品は引手ではなく、鞍と面繫・尻繫をつなぐ鞍である。鉄棒を丁字形に曲げて輪金を製作し、別造りの脚部を輪金に巻き付けて結合する。脚部は扁平で先細りする長い鉄材で、先端が曲がりJ字形を呈する。脚の先を鞍橋に打ち込んで固定していたものだが有機質等は付着しない。刺金を欠く脚部・輪金別造りの鞍はTK10型式期以降に盛行する（宮代1996）。

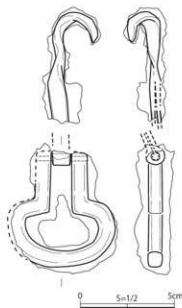


図18 鞍（再実測）

このほか、過去の報告で「翡翠製」⁽²⁾とされた9点の切子玉は、四角錐形を底面で接合した特異な形態であるものの、計測値は一部を除いて高さ14～17mm、幅9～12mmの範囲に分布する。これらを山陰系の切子玉における法量の傾向を参考に、TK10～TK43型式並行期の所産とみる（大賀2009）。また、白玉・ガラス玉との組み合わせもこの年代観と矛盾しない⁽³⁾。

以上の再評価した出土遺物を含めても時期を推定できる要素はやや少ないが、当古墳の築造・初葬をTK10～TK43型式並行期とみておきたい。さらに平成2年度調査では、この年代よりも明らかに新相を示す須恵器が多く出土している。これらは概ね7世紀前半から8世紀初頭までの年代幅でとらえられ、座光寺地区のナギリ1号古墳、上郷地区の飯沼塚田古墳など周辺の古墳と同様に律令期に至るまで追葬等のため利用されていたことを示している。

破却 当古墳は古墳時代後期中頃に築造され、その後も追葬の場として利用されたとみられるが、いずれかの時期に破壊を受けている。過去の調査では、墳丘の中央が想定される付近に地山層を掘り込んで大型の石材が設置された痕跡があり、主体部たる横穴式石室の存在が想定されている。副葬品は周溝底部付近の覆土中に分布しており、追葬が終了してからさほど間をおかないうちに盗掘等を受けたことを示唆する。さらに、周溝底部直上に堆積する「明褐色土」が築造後間もなく埋められた可能性が指摘されていたが、今次調査の周溝内堆積土の観察においては、周溝が人為的に埋め

られたことを示す状況は確認できなかった。したがって、周溝がほぼ完全に埋没してから墳丘が削平されたと考える。破壊の時期は不明のままだが、戦前から戦後にかけての古墳伝承を網羅した『下伊那史』にも当古墳の情報自体がないことから、近代を迎える頃までに墳丘はほとんど削平されていたとみられる。

周辺の古墳・遺跡との関係 南大島川右岸の扇状地に分布する群地古墳群7基のうち、実態が判明している古墳は1号古墳と7号古墳のみである。1号古墳は6世紀前半の築造と推定され、7号古墳と1世代ほどの差が想定される。平面L字形の特異な構造をもつ竪穴系横口式の横穴式石室と、銀製長鎖式垂飾付耳飾が出土したことで知られる1号古墳は、一帯を見渡すことができる尾根突端部の高台に所在する。7号古墳は1号古墳を見上げる位置にあり、両者の関係は密接なものと考えられる。また、7号古墳の南方約250mの地点に所在する高岡第1号古墳は、6世紀前半の築造と推定される全長70m級の前方後円墳で、座光寺地区最大の首長墓である。さらに同時期、一帯を見下ろす段丘端部に小型前方後円墳の北本城古墳が築造される。これら3基の主要古墳の埋葬施設は竪穴系横口式の系譜をひく特徴的な石室をもつ。石室構造を共有する3古墳の築造時期について、澁谷恵美子は石室構造や副葬品、埴輪などを根拠に、北本城→畦地1号→高岡第1号の順と推定し、6世紀初頭から前半までの年代に取めている（澁谷1997）。先に示したとおり、畦地7号古墳はこれらの古墳よりも築造年代が下ることは確実であり、澁谷が示した築造順において高岡第1号古墳の後の段階、すなわち6世紀中頃に当古墳を位置付けたい。よって、畦地7号古墳は特徴的な横穴式石室を採用した3基の古墳の後継にあたる有力階層の墓と推定する。当古墳以前の主要古墳のうち2基が前方後円墳であるのに対し、これ以降に座光寺地区で前方後円墳は築造されず、埴輪の樹立もなくなるなど、当該期は座光寺地区において重要な画期といえる。おそらく当古墳と同段階に比定されるであろう石塚1号・2号古墳は、本格的な無袖式の横穴式石室を具える有力古墳である。両者は距離が離れるものの、東側に広がる集落域を見渡す高い地点に築造されている点は共通しており、ともに首長墓の系譜に連なることも首肯されよう。一方で、その後南大島川のさらに上流側に築造された壺丈敷古墳群や、土曾川沿いに築かれたナギジリ古墳群などとは、集落域から離れた谷筋の墓域として、畦地7号古墳と性格を異にする。これは時代が下るにつれて墓域がさらに奥地に移動したことによるものであろう。以上のように、二度にわたる当古墳の調査により、6世紀初頭の横穴式石室導入後から古墳時代の終焉に至るまでの主要古墳の変遷がある程度追えるようになったことは、地域史上で大きな意義をもつ

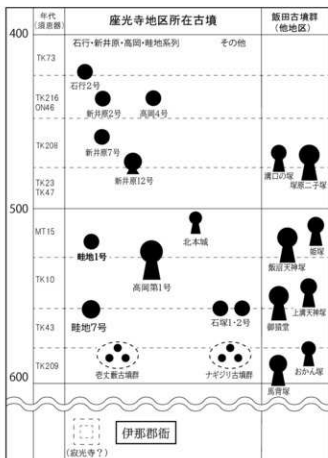


図19 座光寺地区古墳変遷試算

果である。

最後に、恒川官衙遺跡（伊那郡衙）との関係について触れておきたい。当古墳ほか周辺の古墳で奈良時代に至るまで利用された形跡が認められるように、一帯の古墳は律令期を迎えるまで集団の墓や祭祀の場となった。このことは、座光寺地区内で長期にわたる在地集団の一貫性を示唆する。中期古墳の高岡3号古墳においても律令期の儀礼痕跡が確認されたことは、祖霊祭祀の場として官衙にかかわる人々に用いられていたことは想像に難くない（飯田市教育委員会1990）。以上の事実は、古墳時代から発展を遂げ、伊那郡衙の成立へと結実するという、座光寺地区に特有の歴史的推移の一樣相といえる。

註

- (1) 錆化が進行していたため保存処理を実施し、X線写真の情報を得たうえで実測した。なお、平成元年度調査の報告時点では脚部と輪金は一体で図示されているが、現状は破断して分離し、接合しない。
- (2) 平成2年度の調査報告では翡翠製とされたが、碧玉もしくは凝灰岩製と思われる。
- (3) 玉類については広島県教育事業団の岸本晴菜氏よりご教示をいただいた。

引用・参考文献

- 大賀克彦 2009 「山陰系玉類の基礎的研究」『出雲玉作の特質に関する研究—古代出雲における一玉作の研究Ⅲ』 島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター
- 岡田正彦 1986 「飯田市座光寺石行遺跡発掘調査概報」『伊那』1986年6月号 伊那史学会
- 岩崎卓也 1987 「尾張型須恵器の提唱」『信濃』39巻第4号 信濃史学会
- 角脇由香梨 2006 「古墳時代の須恵器生産—東山古窯跡群の性質をめぐって—」『きりん』第9号 荒木集成館友の会
- 小池寛 2010 「須恵器提瓶考」『京都府埋蔵文化財論集』第6集 公益財団法人京都府埋蔵文化財センター
- 澁谷恵美子 1997 「飯田市座光寺の古墳—畦地1号古墳出土資料を中心に—」『飯田市美術博物館研究紀要』7
- 下伊那誌編纂会 1955 『下伊那史』第2巻
- 下伊那地質誌編纂委員会（編） 1976 『下伊那の地質解説』
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店
- 宮代栄一 1996 「古墳時代の金属装鞍の研究—鉄地金銅装鞍を中心に—」『日本考古学』第3号 日本考古学協会

報告書

- 飯田市教育委員会 1990 『高岡遺跡—高岡3・4号古墳—』（飯田市座光寺古市場地区市道改良工事に先立つ埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書）
- 飯田市教育委員会 1992 『畦地下遺跡—畦地7号古墳—』（飯田市座光寺古市場地区市道改良工事に先立つ埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書）
- 飯田市教育委員会 1998 『ナギジリ1号古墳』
- 飯田市教育委員会 1999 『新井原・石行遺跡』
- 飯田市教育委員会 2009 『切石遺跡群』



調査着手前



調査地及び近在古墳（北西上空から）

写真図版 2



調査区2全景（西上空から）



調査区2全景（東上空から）



畦地7号古墳全景（周溝内礫除去後）



同上



畦地7号古墳 墳裾付近



畦地7号古墳 墳丘 礫敷



畦地7号古墳 周溝内礫



畦地7号古墳 周溝 土層断面



調査区1全景



調査区1東壁土層断面（「未満水」土砂と畑作痕）



SK001



SP008・SP009



SK014



SK021



SI012



SD016 B-B' 土層断面



SD016



AZCK7 (睦地7号古墳) 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	あぜち7ごうこふん あぜちしたいせき					
書名	畦地7号古墳 畦地下遺跡					
副書名	市道1-57号北市場市田線他にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書					
編著者名	春日 宇光					
編集機関	長野県飯田市教育委員会					
所在地	〒395-8501 長野県飯田市大久保町2534番地					
発行年月	2024年3月					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村番号 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 調査原因
あぜちなごうこふん 畦地7号古墳	いいでしごうじ 飯田市座光寺 3302-3	20205	35° 32′	137° 51′	2022/11/8 ～ 2023/1/12	143.11.㎡
		598	15″	47″		緊急発掘調査
あぜちしたいせき 畦地下遺跡	いいでしごうじ 飯田市座光寺 3302-3	20205	35° 32′	137° 51′	2022/11/8 ～ 2023/1/12	117.73.㎡
		27	15″	48″		緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
畦地7号古墳	古墳	古墳時代	墳丘・周溝		須恵器	古墳時代後期
畦地下遺跡	集落跡	中世	竪穴建物・土坑・小穴			近世の畑作痕 (畝)を検出
要約	<ul style="list-style-type: none"> ・市道新設に伴う緊急発掘調査 ・畦地7号古墳の墳丘及び周溝の一部を確認 ・古墳時代後期の須恵器（埴瓶、甕、甌）が出土 ・その他に奈良・平安、中世の遺構を把握 					

畦地7号古墳

畦地下遺跡

市道1-57号北市場市田線他に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2024(令和6)年3月 発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534番地

長野県飯田市教育委員会

印刷・製本 龍共印刷株式会社